けんこう処方箋

北海道対がん協会長　加藤 元嗣

がん検診受診率 全国より低水準

がん検診の正確な受診率が把握できていないために、日本の対がん政策が、国際標準から大きな後れを取っていることを前回説明しました。少しおさらいしますと、市区町村のがん検診は厚生労働省の公的統計でまとめられていますが、人間ドックや職域でのがん検診は、国が把握する仕組みができていません。そこで、厚労省による３年ごとのアンケート（国民生活基礎調査）に2004年から、がん検診に関する質問が追加されました。ですが無作為抽出された一部の国民にしか実施されませんので、受診率は推計値でしか分からないのです。

では、日本のがん検診の実態は推計値でどうなのか。2022年の推計受診率は、男女では胃がん48.0％、大腸がん45.7％、肺がん49.7％で、女性の子宮頸がん43.6％、乳がん47.4％でした。また、男性が女性より５～10％高い傾向です。胃がん、大腸がん、肺がん、乳がんは40～69歳で、子宮頸がんは20～69歳のデータです。注意すべきは、子宮頸がんと乳がんは過去２年の受診率を尋ねていて、ほかは過去１年です。１年であったり、２年であったり、そんな質問に正しく答えられる人はどれだけいるのか疑問です。また「検診」と「診療」を明確に区別して回答できているのかといった問題も抱えています。

公費で実施され、正確なデータが分かっている対策型検診の受診率をみると、胃がん、大腸がん、肺がんは６～７％、子宮頸がんと乳がんは約15％です。職場で検診を受けているとの回答が３～５割ですので、それを加えて考慮しても日本のリアルな受診率は、推計受診率より低いのが実態でしょう。2023年からの第４期「がん対策推進基本計画」では、受診率60％以上の達成が目標ですが、不正確な数字をもとに国の方針を決めるのはいかがなものかと思います。

イラスト・佐藤博美

気になるのは北海道です。都道府県別の推計受診率は、胃がん41.4％、大腸がん38.1％、肺がん40.7％でいずれもワースト１位。子宮頸がん36.9％、乳がん37.3％でいずれもワースト２位と、惨憺たる結果です。全国平均より７～10％も低く、トップの山形県が60～70％ですので、大きく引き離されています。また、精密検査が必要と判定され、その後にちゃんと検査を受けた割合（精検受診率）も、北海道はすべてのがんで、全国平均から10％前後低いのです。がん死亡率ワースト２位からの脱却は簡単ではありません。一方、検診における発見率は20～39歳の子宮頸がんを除き、いずれも全国平均を上回っています。がん検診の受診率と精検受診率を上げていくことが北海道のがん対策での最重要課題です。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。